発行日　2004年6月20日（隔月20日発行）通巻239号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター　会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

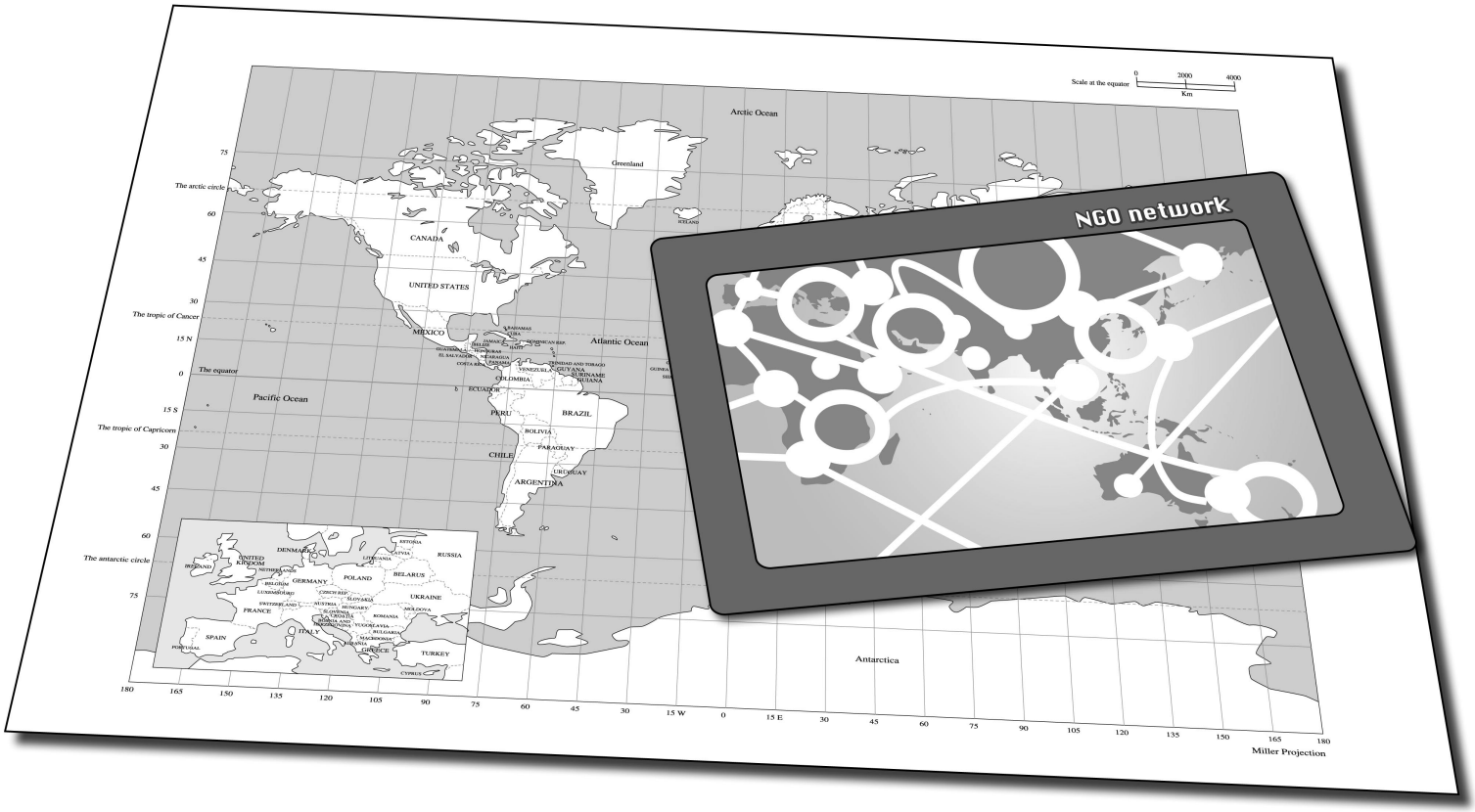
Trial & Error

No.239
July-August 2004

特集

もうひとつの世界地図

JVCが築くネットワーク



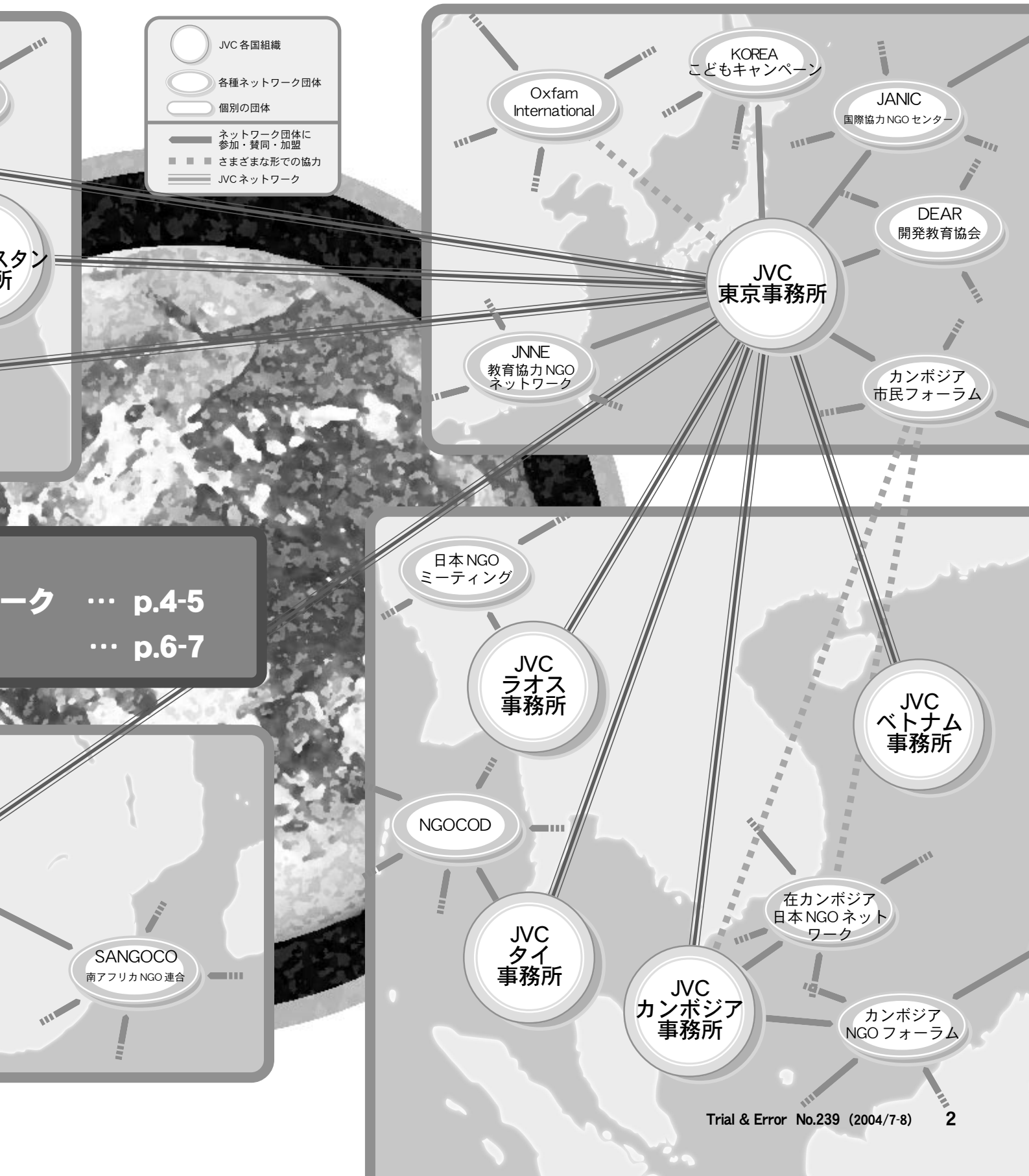
〈プロジェクトの現場から〉
タイ／コリア

〈緊急報告〉
イラク・ファルージャ緊急支援の報告

JVC Japan International Volunteer Center

いつの間にか、国家が我がもの顔で市民に愛国心や自己責任を強要する時代に入ってしまった。「政府の方針に反対するものは反日分子だ」と居丈高に叫ぶ与党国会議員もいる。世界に目を転じると、国家が正義の名のもとに民衆・市民を暴力で抑圧する光景がいたるところで目につく。パレスチナで、アフガニスタンで、そしてイラクで…。

そうした現実に対峙しながら、私たちはいま、“もうひとつの世界”をつくりつつある。対立と排外、武装と暴力、抑圧と押しつけでつながる世界ではなく、平和・非戦、人権、共生、自立といった思想と実践で結びつく人々の世界である。その世界は次第に広がり、力をつけ、影響力をもち始めている。その一翼を担うJVCが、世界のNGOや市民グループ、人々とともにつくりだしている世界を紹介する。題して、“もうひとつの世界地図”――。（編集部）



特集

もうひとつの世界地図

JVCが築くネットワーク

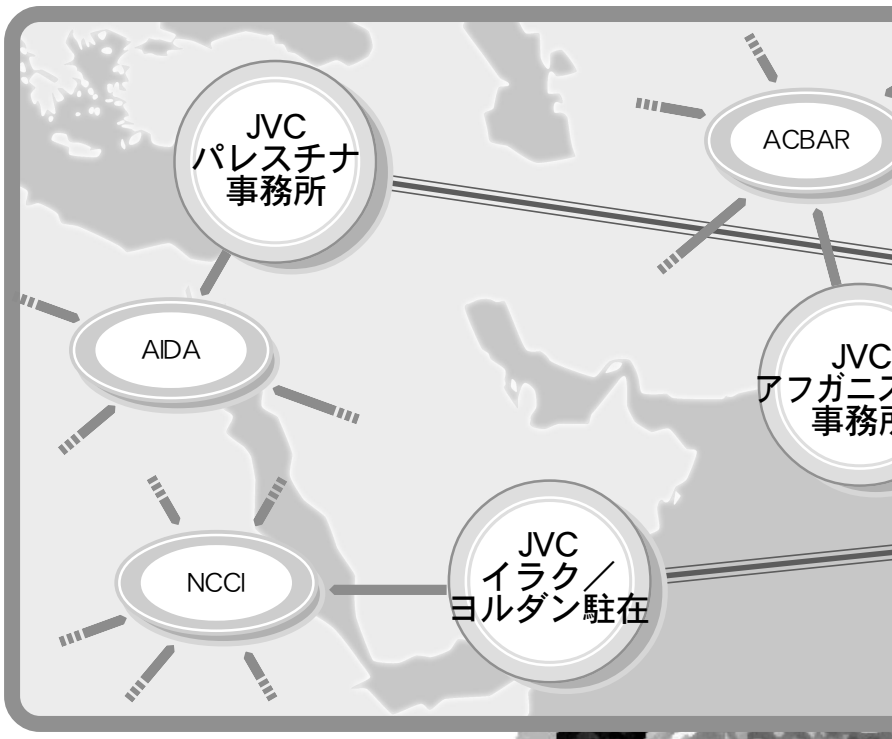
右の図、本当はもっと複雑で入り組んだものになる。まるで曼荼羅のように、点と線が交叉する、始めも終わりもない判じ物のような絵が描けるはずだ。だけどそんなことをしたら、ほとんど理解不能になるし、第一この誌面の枠に収まらない。

JVCを軸とする相関図でさえこうなのだから、世界の市民・民衆組織やNGOのそれを描いたら、大変なことになるだろう。国境線で整然と区切られたこぎれいな現存世界地図とは全く異なる、何ひとつへだてるもののない、やさしさと志と共感で結びつく、もうひとつの世界地図があらわれる。

その中でJVC関連だけを取り出した今回の図は、主として三つの軸から成り立っている。一つは、国内及び国際的なNGO社会をつなぐ軸。第二は、平和・非戦・非暴力・困難に陥っている人々への緊急救援の軸。第三が、人々の暮らしの根っこを支える農の現場で、村の人々が安心して暮らし、生産にいそしめるための活動をつなぐ軸、である。

三つの軸のそれぞれの活動拠点は、その先でさらに次々と枝分かれし、相互に交叉しあいながらつながっていく。この図を見ながらその曼荼羅図を想像していただきたい。これほど豊かな民衆世界が、国家という狭い枠組みをこえてつくりあげられようとしていることに、希望が湧くはずだ。

JVCの活動は、多くの団体・個人の皆さまから提供いただく資金と労働力、智恵によって支えられています。JVCを支える土台ともいえるその部分は、今回は誌面の都合で省かせていただきました。また、大切な仲間を落としてしまった可能性もあります。完全な地図づくりに向け、ご意見をお寄せください。



しっかりした農業と
安心して暮らせる村をつくるネットワ
平和をつくるネットワーク

《団体説明・50音順》

・Oxfam International
100ヵ国以上で各国の市民とともにキャンペーンを行ない、また地域開発事業や緊急人道支援を実施している国際NGO。

・DEAR = 開発教育協会
開発教育の推進に関心を持つ団体・個人によって設立された。

・カンボジア市民フォーラム
カンボジアに関わるNGO、研究者や個人のネットワーク。提言活動を中心に活動している。

・JNNE = 教育協力NGOネットワーク
すべての人の学びの保障を目的に設立された、教育協力に関わるNGOのネットワーク。

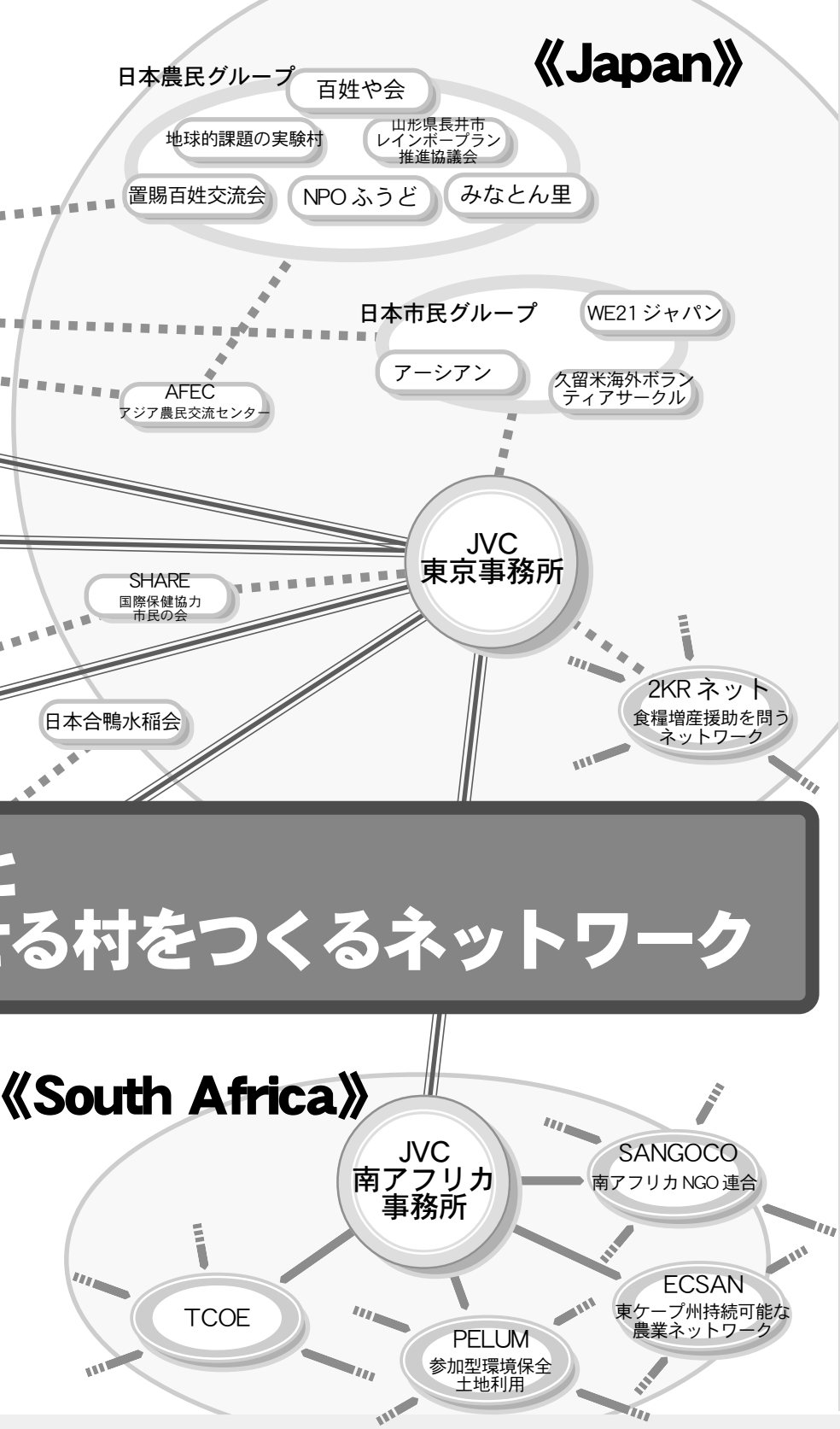
・JANIC = 国際協力NGOセンター
地球市民社会づくりのために、国際協力を行なうNGOの活動を支えるネットワーク。

・在カンボジア日本NGOネットワーク
カンボジアで活動する日本人NGOのネットワーク。

・日本NGOミーティング
ラオス国内で活動する日本の国際NGOのネットワーク。

・SANGOCO = 南アフリカNGO連合
南アフリカ国内で活動する現地NGO、CBO（住民組織）、国際NGOが参加するネットワーク。

※他の団体については、次ページ以降をご参照ください。



《団体説明・国別・50 音順》

■日本■

・WE21 ジャパン／アーシアン
生活クラブ生協の活動から生まれた市民団体。

・NPO ふうど = 小川町風土活用センター
埼玉県小川町の有機農家から生まれた地域自立をめざす団体。

・みなとん里
農作物の直売をする農民女性グループ。

・山形県長井市レインボープラン推進協議会
生ゴミを資源として活用しつつ、土と台所、地域農業と地域社会、地域の中の人と人との出会い直しを通して循環型地域社会を築こうとしている。

■タイ■

・Earth Net Foundation
自然農業の普及活動と有機農産物の流通を担う団体。

・NGOCOD = NGO Coordinating Organization on Rural Development
タイ全国のNGO連絡調整委員会。東北部（イサーン）のNGOCODには約 70 の組織が登録されている。

・AAN = オルタナティブ農業ネットワーク
農業分野のNGOの連絡組織で、近代農業に代わる、自分たちが生きることを目的とした農業の普及を行なっている。

・シュントック = Shontoug Foundation, Inc.
地域に根ざした活動を側面から支援する NGO。

・THAIHOF = Thai Holistic Health Foundation
薬草などによる伝統的民間療法の普及活動から始まった団体。

・PAP21 = The Center for People's Agricultural Plan for the 21st Century
ネグロス島で、土地を獲得して、農業を始めた人々を支援。

・貧民連合 = サマッチャー・コンチョン
農民、漁民、スラム住民、ダム建設反対運動に関わる人々など多様な層から成り立つ緩やかな運動体で、95 年に生まれた。

■ラオス■

・GDG = Gender Development Group
ジェンダー問題に取り組むラオスの団体のネットワーク

・SAF = Sustainalble Agricultural Forum
環境に優しい農業に取り組むラオスの団体のネットワーク

■カンボジア■

・EAA = エコロジカル農業同盟(Ecological Agriculture Alliance)
JVCの農村開発活動者のための資料・情報センター（TRC）が主催していた持続的農業ネットワークに代わり、カンボジアNGOと農民グループ主体で始まる。

・カンボジア NGO フォーラム(The NGO Forum on Cambodia)
カンボジアで活動する国内外の NGO ネットワーク。

・CEDAC = カンボジア農業開発教育センター
有機農業の普及と有機農家のグループづくり・ネットワークを促進するカンボジア NGO。EAA、PRN（農薬削減ネットワーク）の事務局を担う。

・FACT = 漁業行動連合チーム(Fishery Action Coalition Team)
乱獲や零細漁民の漁場からの締め出しなどについて提言活動。

・NTFP = 非木材林産物プロジェクト(Non-Timber Forest Products)
少数先住民族が、不法森林伐採・乱獲から森を守るため、共有林の地図づくりや共同体による所有権の獲得を目指して設立された。

■ベトナム■

・FIDR = 国際開発救援財団
ダナンに事務所を置いて独自の農村開発事業を展開している。

・VUFO-NGO リソースセンター（VUFO-NGO Resource Centre）
国際 NGO の活動の質を高めるための情報交換を目的とする。

■南アフリカ■

・PELUM = 参加型環境保全土地利用
環境保全型農業や土地利用に取り組む東南部アフリカ諸国NGOと農民が参加しているネットワーク。

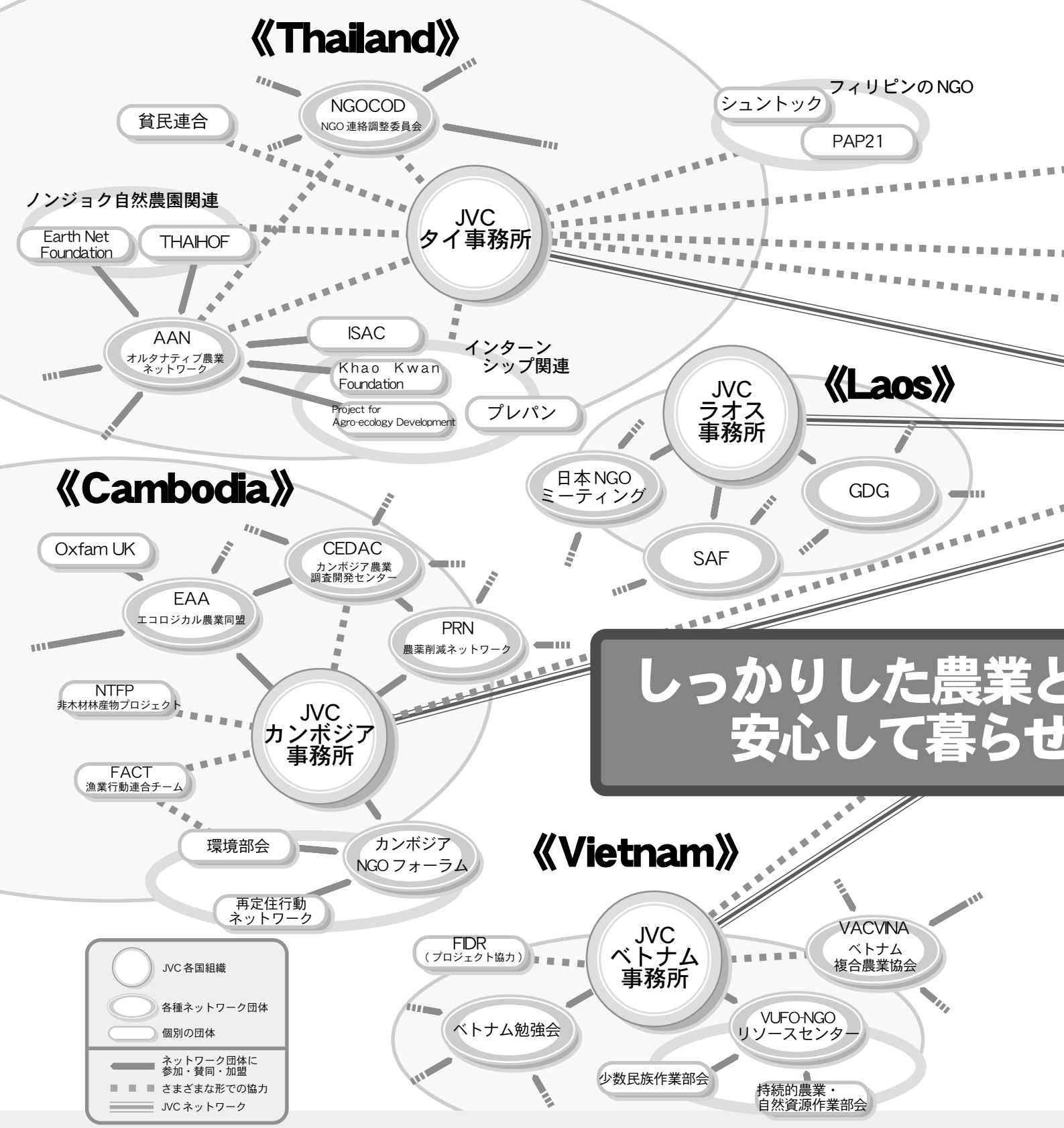
・TCOE = Trust for Community Outreach and Education
参加型農村・漁村開発に取り組む南アの現地 NGO9 団体が参加。

・ECSAN = 東ケープ州持続可能な農業ネットワーク
持続可能な農業に取り組む NGO や農業普及員のネットワーク。

人々の暮らしの根っこを支える農業と村づくりは、ＪＶＣの活動の大きな柱だ。それぞれの風土や社会・経済状況にあわせて、活動の中身にはそれぞれに特徴があるが、共通しているのは、環境を大切にしながら長続きするしっかりした農業をつくることを通して、自立した暮らしを実現しようということである。

しかし、外国からやってきたＮＧＯが落下傘のように村に舞い降りても、それは異物でしかない。村には村の歴史、文化、智恵、人との付きあい方や物事の決め方がある。そこで仕事をするには地元の人と仲間になり、地域やその国のＮＧＯのサポートが大切になる。こうしてＪＶＣは、地域ごとに実にきめ細かく濃密なネットワークをつくってきた。

経済成長のための農業の輸出産業化で伝統的な小農民が切り捨てられてきたタイ。ＪＶＣタイはそこで「もうひとつの農業づくりと自前の市場創造」を目指してさまざまなＮＧＯ、住民組織とつながっている。ここでの特徴は、有機農業や自然エネルギーによる地域自立、循環型地域社会づくりなどを進めている日本の農民グループ、生協を母体とする市民グループなどと密接につながり、同時代を生きる者同士の経験と智恵の交換が活発に進められていることだ。そのつながりはフィリピンの農村にまで及んでいる。



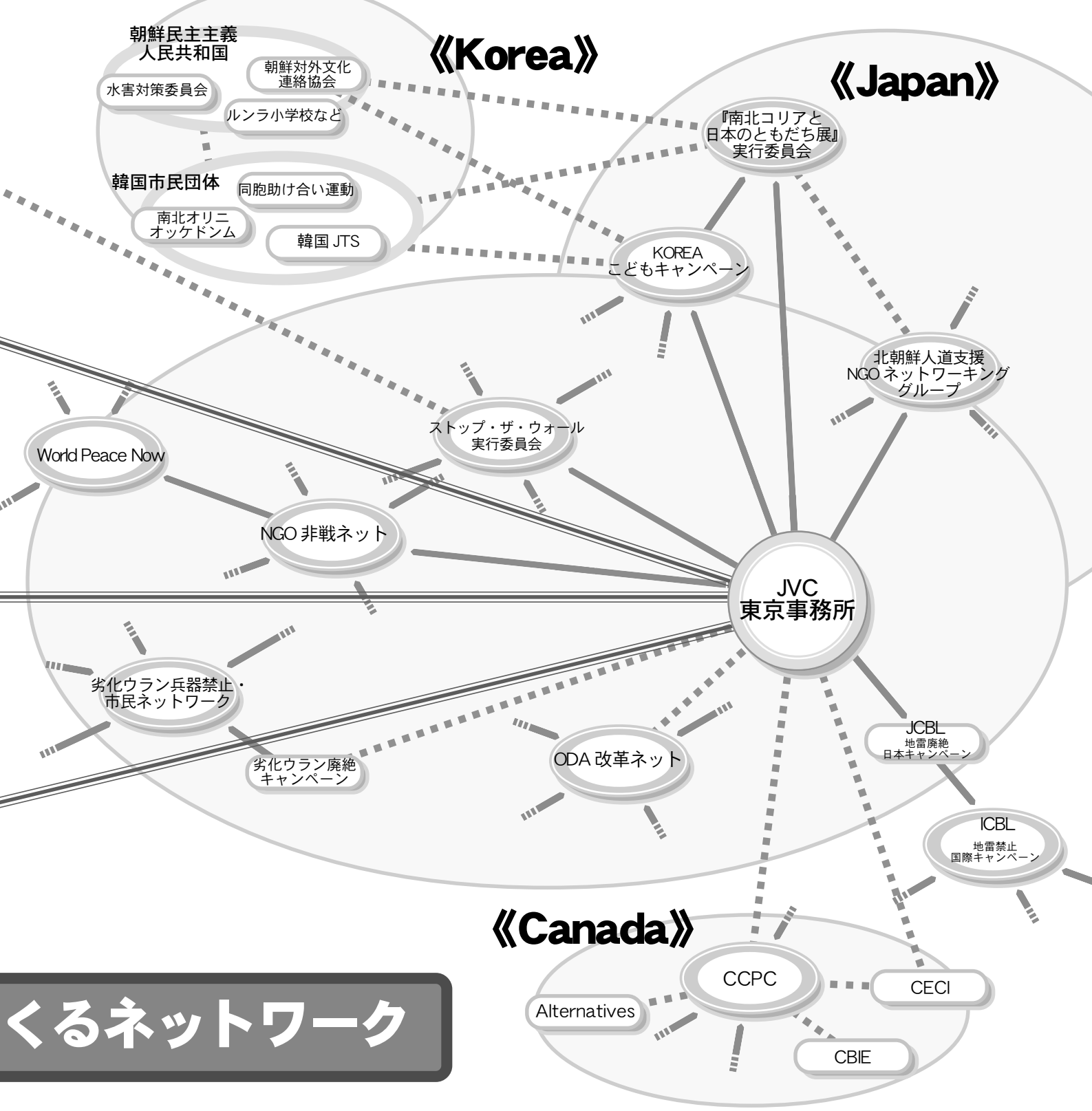
しっかりした農業と安心して暮らせ

ＪＶＣベトナムもまた、ベトナムで活動する各国ＮＧＯと協働の場を持つとともに、日本の農民グループ「日本合鴨水稲会」と結んでの農民技術の交流を行なっている。ベトナム側では「ＶＡＣＶＩＮＡ（ベトナム複合農業協会）」が、田んぼでの普及活動と同時に、アジア合鴨シンポジウムなども開催している。

ＪＶＣカンボジアが持つつながりも多彩だ。農薬削減、環境にやさしい農業、漁業、非木材林産物など、地域資源を守るさまざまな活動体との連携をつくりあげている。漁業や林産物への取り組みは、開発や商品経済の浸透が進み、共同体に守られた伝統的な暮らしや生産が崩れてきている中で、人々の暮らしをどう守るかを問いかけるものだ。

ＪＶＣラオスでは、環境にやさしい農業に取り組むラオスの団体とネットワークを組み活動している。

南アフリカでも農村復興は大きな課題である。ＪＶＣ南アフリカは「東ケープ州持続可能な農業ネットワーク」や環境保全活動、農村・漁村開発に取り組む団体と連携すると同時に、自然農業の指導者とも組んでさまざまなワークショップを行なっている。また、日本のＮＧＯ「食糧増産援助を問うネットワーク」と協力し、日本政府の農業援助のあり方を問い直す提言活動も行なっている。



くるネットワーク

「世界がパレスチナ化している」と語ったのは、JVCのスタッフとして長くパレスチナで活動し、現在東京事務所でイラク事業を担当している佐藤真紀である。「パレスチナ化」とは、圧倒的に強大な軍隊が暴力で人々を抑えつけ、そこから絶望的な抵抗が発生、いっそう暴力的な抑圧が強まる悪循環の世界をさしている。その悪循環はパレスチナからアフガニスタン、イラクへ拡がり、世界全体を陰鬱な状況に追い込んでいる。

そのパレスチナ、アフガニスタン、イラクでJVCは多くのNGOと手を組みながら緊急救援と平和づくりの仕事をしている。パレスチナでは、国家としてはパレスチナの人々を抑圧する側に立つアメリカの「アメリカ中近東難民救援」、イスラエルの「人権のための医師団ーイスラエル」と、JVCやパレスチナのNGO「医療救援委員会」の連携が実現している。国家とか国益とかの枠にとらわれている立場からみれば、まさに「奇跡の連合」だろう。アフガニスタンやイラクでも、JVCとつながるNGOのネットワークは次々と枝分かれしながら世界に伸びている。

東アジアの平和づくりの最前線、朝鮮半島においても、NGO、市民のネットワークが国内、韓国をつなぎ、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）への人道支援を進めている。このネッ

《団体説明・国別・50音順》

■日本■

・NGO非戦ネット
02年7月、武力によらない紛争解決を求めるNGOのネットワークとして発足。03年3月、イラク武力行使への反対を要請する署名を日本政府に提出した。

・JCBL = 地雷廃絶日本キャンペーン
世界規模での地雷廃絶を目的として、92年に世界各国の市民団体・NGOから結成されたICBL(地雷禁止国際キャンペーン)に連なる日本の団体として、97年に結成。

・劣化ウラン兵器禁止・市民ネットワーク
イラクやアフガニスタンなどで使用された劣化ウラン兵器の廃絶へ向け、国内外の世論形成をはかるために結成されたネットワーク。

・World Peace Now（ワールド・ピース・ナウ）
02年末に、「もう戦争はいらない」「イラク攻撃反対」「非暴力アクション」「日本のイラク攻撃協力に反対」の4つの賛同点に結集した、政党・宗教・市民団体などの枠を超越したネットワーク。

■コリア■

・KOREAこどもキャンペーン
95年に起きた朝鮮民主主義人民共和国での洪水被害に対して支援。その後、現地の子ども施設への訪問をくり返すなかで、子ども交流プログラムとして、絵画の交換プログラムなども続けており、日本でも絵画展を開いている。現在、地球の木、アーユスとともに3団体で構成。

■カナダ■

・ Alternatives
コミュニティ対話（ブルンディ・コンゴ）、アドボカシー・ロビー（パレスチナ）、国家-市民社会対話（ボスニア）、地雷教育・アドボカシー（イエメン）、ピースキャンペーン（インド・パキスタン）などを行なっている。

・CBIE = Canadian Bureau for International Education
国際及び国内で平和教育分野で活動しているNGO。トレーニング、技術協力、平和教育交流などのプロジェクトを実施。

・CECI = Canadian Centre for International Studies and Cooperation
経済開発、貧困緩和、民主主義、人権と紛争予防、社会、コミュニティ開発、自然資源管理、緊急援助と復興などを行なっているNGO。

・CPCC = Canadian Peacebuilding Coordination Committee
人道援助、開発、紛争解決、平和、協会基盤、人権のセクターで活動するNGOのネットワーク。

■パレスチナ■

・AIDA = Association of International Development Agencies
パレスチナ自治区で人道支援を行なう国際NGOの協議体。

・ANERA = アメリカ中近東難民救援
栄養改善支援、緊急支援でJVCとともに活動している米国のNGO。

・PHR-Israel = 人権のための医師団―イスラエル：イスラエルNGO
パレスチナ自治区への巡回診療などを行なっており、アラブ-ユダヤ、パレスチナ-イスラエル間の信頼醸成につながっている。

・Stop the Wall Campaign／ストップ・ザ・ウォール実行委員会
パレスチナの「分離壁=フェンス」の問題を訴え、建設を止めていくための国際的ネットワーク。日本でも、この問題をより広く知ってもらうため、ストップ・ザ・ウォール実行委員会が結成された。

・ UPMRC = パレスチナ医療救援委員会：パレスチナNGO
パレスチナ自治区の医療に関して重要な役割を果たしているNGO。

・ハンダラ文化センター（ベツレヘム・ベイトジブリン難民キャンプ内）
JVCが2000年から図書館活動などの交流・支援をしているセンター。地元の若者が中心になり、子どもたちのダンスや音楽活動、補習、カウンセリングなどのプログラムを自主運営している。

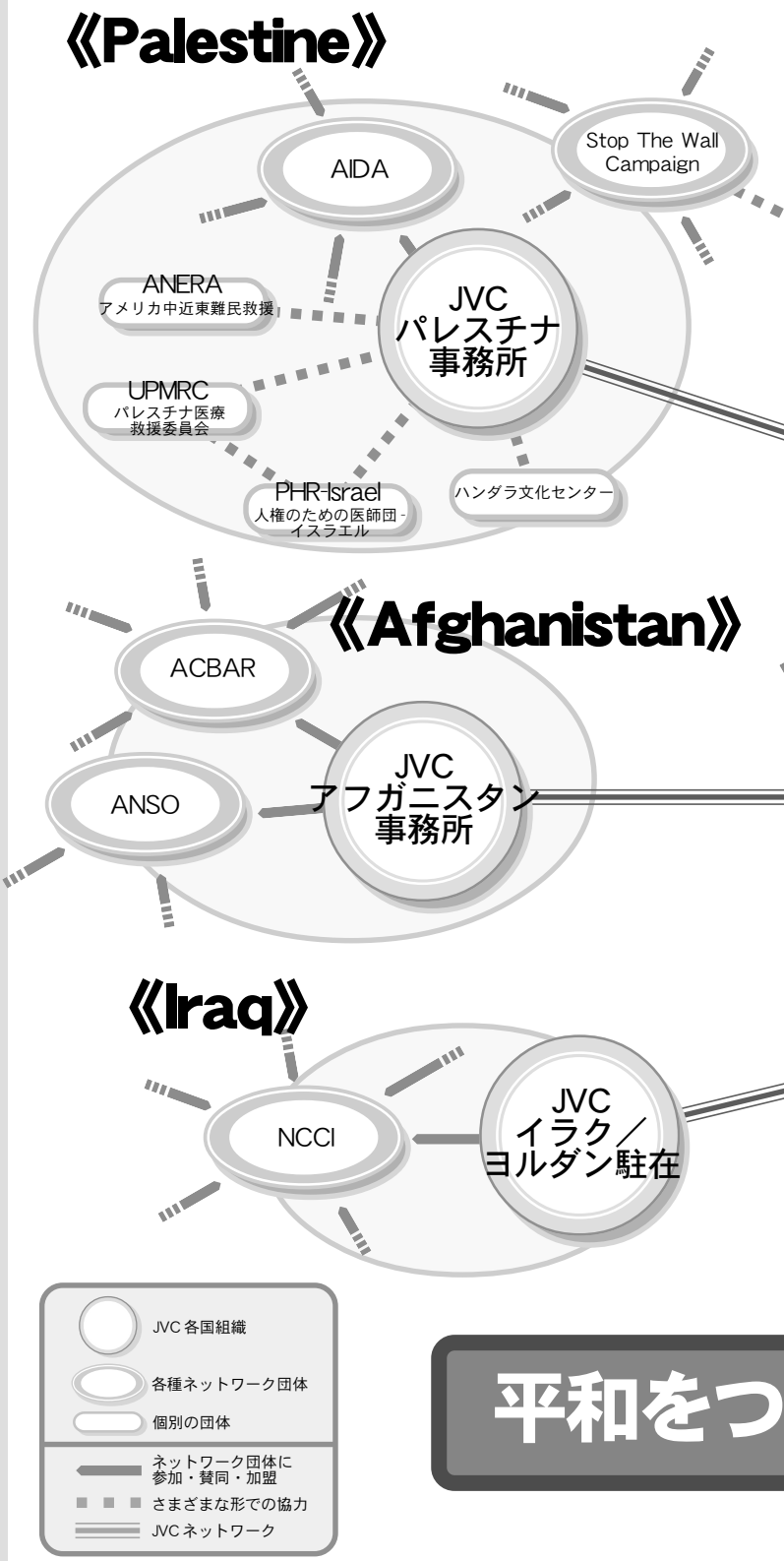
■アフガニスタン■

・ACBAR = Agency Coordination Body for Afghanistan Relief
アフガニスタンで活動する国際NGOとアフガンNGOの連合体。約90団体が加盟。団体間の活動調整、情報収集と提供、政府や援助機関との交渉などを行なっている。JVCのアフガンでのアドボカシーは主にこことの協力で行なっている。

・ANSO = Afghanistan NGO Security Office
治安状況や安全対策に関してアフガニスタンで活動するNGOへの情報提供とNGO間調整を実施するNGO。

■イラク■

・ NCCI =イラクにおけるNGO調整委員会
イラクで活動するNGOの連合体（04年1月段階で112団体が参加）。治安を含む支援活動に必要な情報を提供・交換する場として機能している。



平和をつ

トワークは北東アジアの平和づくりの根っこになるはずだ。

国際的な平和構築に向けての作業にも、ＪＶＣは関わっている。非武装平和構築で先進的な実践と調査研究を積み上げているカナダのＮＧＯ、政府機関との連携だ。平和に関わる具体的な連携と行動という面では、地雷廃絶に向けての世界につながる運動にもＪＶＣは関わっている。この「地雷廃絶日本キャンペーン」は、地雷生産・保有国だった日本政府に、地雷廃絶のオタワ条約批准と地雷廃棄を行なわせるという実績をあげた。

ＪＶＣは、こうした人道支援や平和構築分野でＮＧＯとして活動しながら、非戦・平和の市民運動にも積極的に参加している。二十九団体、百七十三の個人で構成する「ＮＧＯ非戦ネット」に賛同団体として参加、この非戦ネットを通して、日本の反戦・平和運動のひとつの核を形成している「ワールド・ピース・ナウ」につながり、市民団体、宗教者、労働運動、人権・環境・開発問題に取り組むＮＧＯなどとともに行動している。

また政策面では、国益と日本企業益を強く打ち出し、本来の趣旨から大きく逸脱（いつだつ）してきているＯＤＡ（政府開発援助）のあり方に対し、各地のＮＧＯ、市民団体とネットワークを組んで、異議申し立てとあるべき姿を提示し、その実現を迫る活動を行なっている。

イラク・ファルージャ 緊急支援の報告

イラク現地駐在員　原 文次郎

戦火のファルージャ、一万人以上が避難生活

バグダッドの西部ファルージャ。四月五日から約一ヵ月間、この地は米軍の激しい攻撃にあい、一万人を超す人々が最低限の食糧・医療もままならない避難生活を送りました。この間に亡くなった一般市民は、子どもを含め八百人以上にのぼります。

四月七日、イラクで支援活動をする国際NGOの協議体NCC（百十二団体参加）は、ファルージャ被災者への緊急支援を開始しました。NCCのメンバーとして、JVCも隣国ヨルダンのアンマンからこれに参加。被災者への食糧支援と、戦闘に巻き込まれ傷ついた人々へ医療支援を行ないました。

■破壊された一般家屋

バグダッドへ逃れてきた家族に食糧を

戦火のファルージャを逃れ、バグダッドのモスクへ着の身着のままで避難してきた人々。まず、彼ら九百五十五世帯（約六千八百名）が一週間生活できるための食糧を支援しました。米、砂糖、小麦粉、トマトペーストなどの食糧にせっけんと洗剤を加えた、緊急時のキットです。

四月末、激しい戦闘は終結。避難していた人々の多くはファルージャに戻りましたが、水・電気などのライフラインが破壊されており、五月に入っても引き続き苦しい生活を余儀なくされました。JVCはイタリアのNGOと協力し、ファルージャ市内のモスク四ヵ所に対して二千家族分の食糧キットを支援しました。

ローカルボランティアとの連携

ファルージャ市内のモスクへの搬入と家庭への配布に際しては、ファルージャの住民を中心に新しくできたイラク人のボランティア組織のファルージャ救援協会（Fallujah Aid Association）のメンバーの助けを得ています。

食糧キットに入れるパンは、当初の計画ではバグダッドで調達する固いフランスパンの予定でしたが、現地ボランティアの尽力で、ファルージャ市内で焼いたやわらかいイラク式のパンを配布することができました。

■５月、ファルージャ市内で食糧配布

合わせて約 3000 世帯の避難した人々に対して緊急食糧などを支援。

■配布にはイラク人ボランティアの力が欠かせない

しかも、想定していた値段より安く仕入れることができ、配布先を八百件増やすことができました。

現在、そしてこれから

ファルージャでは、軍事衝突によるけが人などの手当てに必要な緊急支援は行き届きつつあります。しかし、生活に必要な水や電気の供給が絶たれている地域が多く、これらを復旧して生活を立て直すには、なお時間がかかることが予想されています。またナジャフやカルバラでも、戦闘があれば救援が必要とされることが見込まれます。これからも迅速な支援ができるよう、今後とも皆様の暖かいご支援をお願いいたします。

■安全面を鑑み、JVCは当面イラクの隣国ヨルダンを拠点に支援活動を行なっております。

タイ

農村で学ぶ インターンシップ

森本 薫子（かおる）

タイで一年間のインターンを修了し帰国すると、「ぴ～の～ん」という称号（？）が与えられる。タイ語で「兄弟姉妹」という意味だ。血縁関係よりも幅広く、親しい友達同士にも使われる呼び方である。現在日本には「ぴ～の～ん」が二十九名、タイには「ぴ～の～ん」予備軍が四名いる。

インターン修了後の進路は多彩だ。自然農業を始める者、生産者（農民）と消費者をつなぐ活動を目指す者、地域活性化のための住民組織を立ち上げようとしている者、健康な身体と心を保つための自然食や伝統医療、未来を担う子どもたちのための自然・環境教育など様々な分野に進んでいる。まだ修行中の者も多い。私はここに大いなる成果と希望を感じる。

インターンは、自然環境を次から次へと破壊して「便利」を求め、人間の能力、知恵、創造力、心の安定が失われている現在の状況に危機感を感じた。タイで目の当たりにした不公平な社会のシステムに不条理を感じた。これらには、海外での協力活動だけではどうにも変えられないことがあると感じたのである。インターンが口を揃えて「自分の生活を見直したい」というのは、このような想いがあるからだ。その結果、自分の得意分野や最も関心があることを切り口に、現在の進路を選択しているのである。実際にはひとつの方向に向かっているのだ。

「ぴ～の～ん」は毎年合宿を行なっている。日本で生活していると大きな波に飲み込まれそうになり、自分の考えていることは理想でしかないのかと自信をなくすこともある。でもそれは決して理想ではなく、一人一人が変わることによって実現可能な、もっとも確実なステップなのである。合宿はそれを確認し、前進する勇気を与え合う大切な場となっている。

（インターンシップ プログラム担当）

message from the field

プロジェクトの現場から

写真：「東北アジア子ども平和ワークショップ」での一場面。
彼女らの笑顔を未来につなげたい。

コリア

南北コリアと 日本のともだち展

寺西 澄子

「私たちの平和教育は、どのくらい子どもたちに届いているのかな」「成果がなかなか見えない気がする」。五月の連休に韓国で行なわれた「東北アジア子ども平和ワークショップ」終了後の評価会で、韓国ＮＧＯ・南北オリニオッケドンムの学生ボランティアから出た感想だ。

オッケドンムは普段から小学校に出向いて平和教育の授業をするなど地道な活動を続けている。私たちは彼らと協力し、北朝鮮と韓国・日本の子どもたちによる絵画展を三年にわたって開催してきた。オッケドンムの平和教育は、南北統一だけでなく、統一後も視野に入れている。半世紀以上も分断されていた心をどう近づけるか。どう認めあうか。一回の授業やイベントだけでは到底伝えきれない事柄だけに、時間をかけて取り組まざるをえない。

日本で子どもの絵の交換と展示を続けてきた私たちも、似たような課題に向かい合っている。強く共感してくれる在日コリアンの人々に出会ったり、地方で展示会を実現したり、広がりを着実に感じる一方で、「友だちを増やし、隣の国に不信感ではなく親近感を持ってほしい」という想いが子どもたちにどれだけ伝わっているのか、今のところは未知数だ。

子どもと向き合う作業は、南北コリアと日本が対話を進め、多くの人が「平和ではない感情」を乗り越える日まで何度も繰り返し、続けていかなくてはならないものだ。オッケドンムのスタッフと、「一人でも多くの人に、長く支えてもらえる活動でありたいね」と励ましあって別れた。

（コリア事業担当）

■今年の「南北コリアと日本のともだち展」東京展は、七月七日～十四日まで、東京・渋谷の東京都児童会館で開催されます。

JVCプロジェクト一覧

JVCは、現在９つの国／地域で活動しています。

パレスチナ

・幼稚園児栄養改善支援
・ラファ緊急支援

イラク

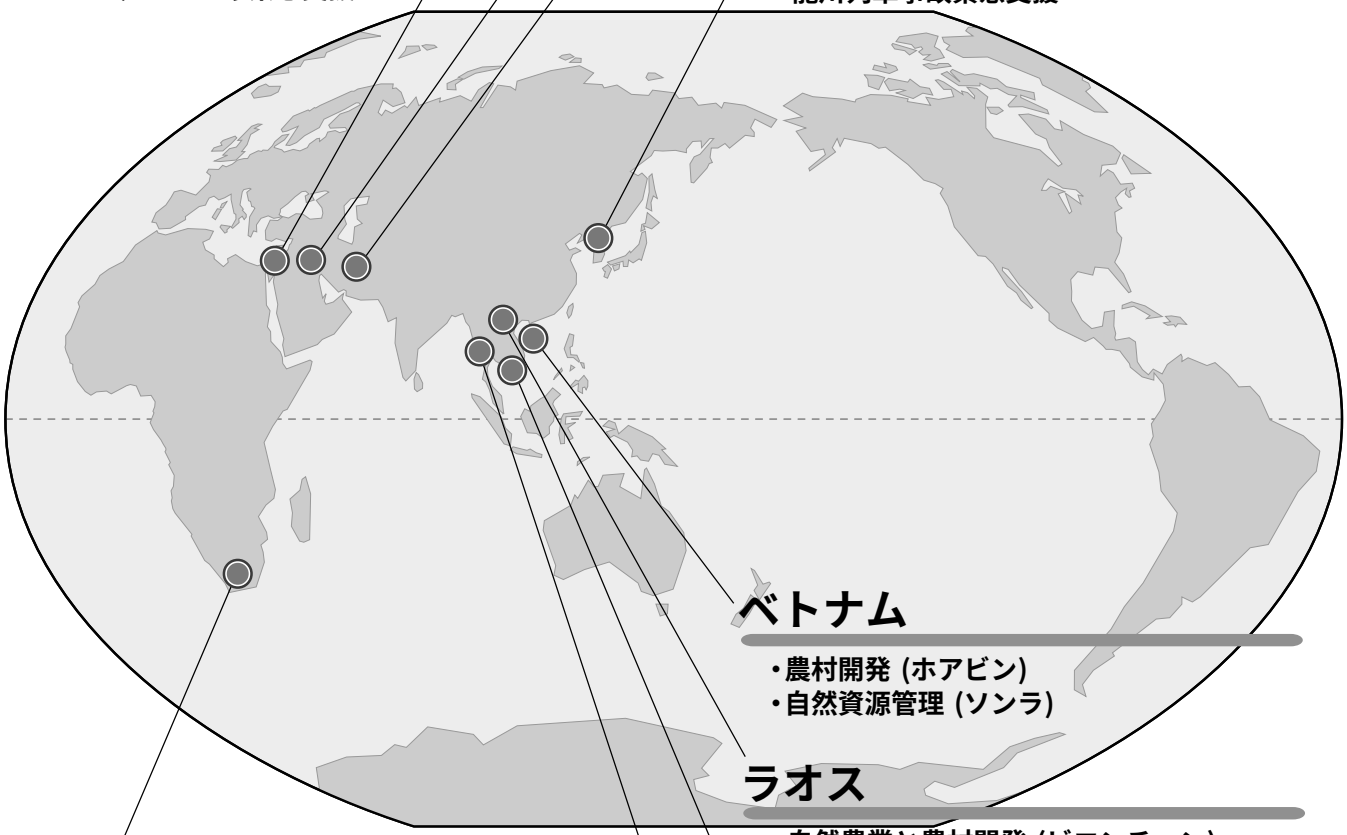
・医療支援
・ファルージャ緊急支援

アフガニスタン

・東部地域医療支援
・シギ高等女学校支援
・政策提言

コリア

・『南北コリアと日本のともだち展』
・龍川列車事故緊急支援



ベトナム

・農村開発（ホアビン）
・自然資源管理（ソンラ）

ラオス

・自然農業と農村開発（ビエンチャン）
・森林保全と自然農業（カムアン）

南アフリカ

・農村開発
・子どもの教育支援
・調査研究・政策提言
・HIV/エイズ調査

カンボジア

・持続的農業と農村開発（SARD）
・資料・情報センター（TRC）
・技術学校
・調査研究・政策提言

タイ

・地場の市場づくり
・農村で学ぶインターンシップ

（2004年５月現在）

《開発協力》

タイ THAILAND

地場の市場づくり

コンケンでは、地域循環の流通システムをつくり出すために、「地場の市場」づくりを進めているが、ポンの町の直売市場（週一回）を構成する五地域の村人と町の消費者との交流会をすでに三地域で行なった。各回三十人ぐらいの消費者が村の有機野菜農園を訪れ、有機農業や地場の市場の意義について話し合い、お互いの理解を深めた。他の二地域でも行なう予定。（倉川）

農村で学ぶインターンシップ

NGO活動や開発に興味がある人を対象に、タイの農村で学ぶ機会を提供する本プログラムは、現在九期生を迎えて半年になる。八期生は四月にスタディーツアーとして、生態系に配慮した農業開発を行なう活動、村人による共有林管理の活動などを訪問し、五月に帰国。東京で報告会を行なった。九期生は同じく五月に中間報告を行ない、それぞれの学び、考え、迷いなどを話し合った。（森本）

カンボジア CAMBODIA

持続的農業と農村開発（SARD）

安全な水と食糧の確保を目的とし、九四年からプロジェクトを実施している。今年は五月に入りようやく雨季らしく雨の降る日が多くなった。村の人は雨を見て堆肥（たいひ）をまき、牛を使って田を耕し始めた。まもなく稲の苗作りが始まる。（山﨑）

資料・情報センター（TRC）

SARDプロジェクトから得た経験やそれに関する情報を蓄積し、また、同じく持続的農業や農村開発のプロジェクトに携わる人々と情報を共有するために九五年に設置された。NGO、政府機関、国際機関などの職員や、大学生が来館し、四月は八十四名に計九十三冊の本を貸し出した。（山﨑）

技術学校

自動車修理・溶接を学ぶ職業訓練校・整備工場。広島県は毎年、職員一名を技術研修で受け入れているが、今年はJICAと連携し、技術者のカンボジアへの短期派遣と同校・工場長らの広島での短期研修の実施を決定した。また、プノンペン校が移転させられる場合の補償条件について、カンボジア人弁護士に相談した。

シアヌークビル校では運輸局長が人事異動や会計システム改良など、自己採算を目指して経営改善努力を続けた。（米倉）

調査研究・政策提言

トンレサップ湖の漁業共同体による自然資源管理を阻む問題について、コンポンチュナンとバッタンバンでのフィールド調査報告書をまとめつつある。漁業共同体運営に関する教本は五月に完成した。

土地調査は、土地登記が成功して土地紛争が激減した事例調査をコンポントムで行なう。

ラタナキリ県先住少数民族の共有林管理を支援しているNGOのNTFPの機構改革に協力している。（米倉）

ラオス LAOS

自然農業と農村開発（ビエンチャン）

五月末に開かれる本プロジェクト最終評価会議に向けた準備を進めている。村で収集したデータを集計したり、レポートを作成したりと、スタッフ総出で作業にあたっている。また、六月末のプロジェクト終了に向けて、簡易水道の管理や回転資金の運営が村人自身でできるよう、フォローアップを行なった。（名村）

森林保全と自然農業（カムアン）

四月下旬に、ナカイヌア村の村人を対象に、ラオス南部の水力発電ダムによる移住事業の影響を学ぶスタディーツアーを行なった。この村は、ナムトゥンⅡダムプロジェクトによって移住を余儀なくされているが、将来どのようなことが起こるのか見ておきたいという村の要望から実施した。その結果、村人は事業への不安を率直にJVCに訴えてくるようになり、これらの声を政策決定機関に伝える活動を始めている。

五月上旬には、農業技術の交流会を行ない、各村や各郡で抱える農業の問題や解決方法を話し合った。（名村）

ベトナム VIET NAM

ハノイ事務所

毎月一回日越スタッフの自主研修を行なうこととし、第一回目を五月に行なった。テーマは「JVCの活動目標と活動方針を理解する」。討論の中でベトナムと日本の文化的違いを再認識することもあり、学び合うことの多い機会となった。（西）

農村開発（ホアビン）

九九年からホアビン省で実施している住民参加型農村開発プロジェクト。今年度に新たに活動を実施するナムソン村にて、参加型農村調査を実施した。村内七集落全てを回り、直面している問題について住民と共に確認し、その解決方法について考えた。この結果をもとに、ナムソン村で発足したばかりの村づくり委員会とともに今年度の活動計画を立案した。（伊能）

自然資源管理（ソンラ）

住民による自然資源管理の活動を支援しているコマ村の対象三集落で、三月下旬、等高線農業のグリーンベルトをつくるための種子を配布し、あわせて再度の技術研修を実施した。研修では技術のみならず、持続的農業の理念も理解してもらうよう努めた。また、畜産振興のための家畜へのワクチン接種が、養成した草の根獣医によりコマ村全域で実施された。（田村）

SOUTH AFRICA 南アフリカ

農村開発

村人の自給と農村地域の復興を目指して、〇一年より東ケープ州カラ地区で環境保全型農業の研修と普及を行なっている。堆肥（たいひ）づくりやシードボール（種、堆肥、土を混ぜて小さな団子状にしたもの。乾燥地でも発芽率がよくなる）を使った植林・小麦栽培などの研修を行なった。

村での普及の中心になる実践農民が定期的なミーティングを持ち、実践例や普及方法の情報交換をしている。五月にはローマ村に十九名が集まり、活発な議論が行なわれた。（津山）

子どもの教育支援

障害児のための施設がなかったジョハネスバーグ市郊外の貧困地区で、住民によって設立されたテボホ障害児ホームへの支援を二〇〇〇年から行なっている。子どもたちの学習機会やリハビリを向上させるためのスタッフ研修を実施した。（津山）

調査研究・政策提言

日本国内のNGOや研究者が参加するネットワークを通じて、ODA（政府開発援助）による食糧増産援助（通称2KR）の問題に対する提言活動を行なっている。（津山）

HIV／エイズ調査

南アフリカで大きな問題となっているHIV／エイズに関し、新規プロジェクト開始のための調査を行なうことを予定している。現在、調査地の選定や、調査内容の検討を行なっている。（津山）

《緊急対応》

AFGHANISTAN アフガニスタン

東部地域医療支援

・地方クリニック支援

保健省管轄カスクナール郡のクリニックへ器材や薬品を提供し、当面八月末までの予定で、スタッフの現場研修やクリニック運営指導を開始した。（本間）

・女性医療従事者養成コース

保健省が運営する東部地域唯一の女性医療従事者養成コースは、保健省と支援NGOとの調整が進み、JVCは十二教室の備品や検査室の設備補充など教育環境の整備を分担する予定。（本間）

・伝統産婆の職能向上研修

ナンガルハル県で四ヵ所目のトレーニングを終了し、前三ヵ所での二回目のフォローアップ準備と活動内容の改善を計っている。（本間）

シギ高等女学校支援

ナンガルハル県シギ村の女子学校校舎増設が県教育局に承認され、現場で働く建築士を採用して設計図の最終案もできあがった。近日中に建設作業を開始する予定。（本間）

政策提言

本年九月（予定）の選挙に向けた武装解除や軍隊による復興援助の問題点を明らかにするとともに、現地のNGOとも協働しアフガニスタンの平和に関わる課題をモニターしながら引き続き提言活動を続ける。（本間）

IRAQ イラク

医療支援

バグダッドの教育病院を中心に、ガン・白血病の子どもたちの治療に欠かせない抗ガン剤や、抗生物質などの薬品の支援を隣国ヨルダンから続けている。四月五日より四月十八日まではバグダッドに滞在し、約五十名の一ヵ月分の薬を、直接病院に渡した。（原）

ファルージャ緊急支援

四月、イラク国内のファルージャでの軍事衝突が激しくなり、緊急支援活動を開始した。他の国際NGOとの協力により、紛争中はバグダッドにてファルージャからの避難民への食糧と医薬品配布の支援を行ない、紛争後はファルージャへ戻った避難民を中心にした人々への食糧配布と地域保健医療センターへの医薬品の支援などを進めている。（原）

※JVCは安全面を鑑み、当面イラクの隣国ヨルダンを拠点に支援を行なっております。

PALESTINE パレスチナ

ラファ緊急支援

ガザ地区南部ラファでは、五月に入りイスラエル軍による家屋や民間施設への激しい攻撃があり、多数の市民が死傷、一千人以上の住民が家を失った。

この間の封鎖で不足した食糧や医薬品を届けるため、国際NGOは共同で二十三日から緊急支援を開始した。JVCは、牛乳と高栄養ビスケットを同地区の貧しい家庭の子どもたちに緊急支援すると同時に、特に深刻な栄養失調の子どもを抱える最貧家庭に、豆、肉、野菜、母乳の代わりとなる栄養食などを支援している。（藤屋）

KOREA コリア

南北コリアと日本のともだち展

韓国NGO「南北オリニオッケドンム」が、大田（テジョン）エキスポ公園（韓国・大田市）にて「東北アジア子ども平和絵画展」を開催した。日本からも八名の子どもが参加し、韓国の子どもたちと交流した。日本の子どもと民族学校（朝鮮学校）に通う子どもが、ともに韓国を訪問するのは初。（寺西）

龍川（リョンチョン）列車事故緊急支援

四月二十二日に平安北道（ピョンアンプクド）龍川市で起きた列車事故に対し、「KOREAこどもキャンペーン」として緊急支援を行なった。内容は医療用資材（ガーゼ、脱脂綿、包帯など）および医薬品（熱傷用軟膏、目薬など）で、朝鮮赤十字社を通じて現地に届ける。（寺西）

スタッフのひとりごと

自転車つらいよ、楽しいよ。

ラオス事業担当　越智 美奈

イラスト／かじの 倫子

東京事務所では密かに自転車が流行っている。調査研究担当の高橋さん、会報誌＆会員担当の細野さん、インターンのクリスさんは自転車通勤。募金担当ボランティアの辻さんはユーラシア大陸を自転車で横断すべく、10回近く現地に通っている。

そして私はキャンプをしながら国内旅行。寝袋、コッヘル、ガス…、必需品は多い。が、何せ自転車。自分の体力分しか移動できないし、運べない。だから荷物は最小限にし、デイバック一つに無理やり詰め込む。

自転車で旅するようになって、景色は感じるものだと改めて知った。日差しや風や匂いや湿度。春は芽吹きや花々の香りが、夏は緑が立ち込め、秋は染まる木立が彩り、冬の張りつめた空気もいい。

観光地はあまり行かない。車だと通り過ぎてしまうだろう（あるいは通ることもない）町や村ほど面白い。各地にある直売所には地のものが並び、安全な食への取り組みも結構多い。お祭りや野焼き。農作業の合間の笑いが絶えない休憩。珍しいのか、話しかけられることも多い。ほんとに地域は面白い。

その一方で、うーん、と思うこともある。夕食の買出しをするお店を探すと、「ここにはないよ。ちょっと行けばジャ〇コがあるから」と教えられる。その「ちょっと」は車で10分とか20分で、自転車だと3倍はかかる。山を越えないといけなかったりもする。もし車がなかったらどうするんだろう。消えつつある小さな商店は、お年寄りの生活を支えていたりして、地域で暮らすにはやっぱり大切だと思う。

なんていいつつも、汗をかきかき走る途中でのコンビニや自動販売機は、やっぱりありがたかったりする。

みるよむきく

『日本の農業を考える』

大野和興著　岩波ジュニア新書　780円＋税

戦争の背景には、政治と経済の思惑が交錯している。グローバル化が進む現代社会では、戦争を正当化する理由として挙げられる安全保障には、日本の国土を「敵から守る」という側面よりも、海外の資源と安価な労働力の確保という意味合いが強い。それは、海外を管理することが私たちの「暮らしを守る」ことになるからだ。

暮らしの基本である「食」は、日本の場合、自給率は四〇％に過ぎない（カロリーベースで計算）。穀物自給率は二八％。米の自給率が九五％だから、他がいかに海外に依存しているかわかる。どうしてこうなってしまったのか？　本書は、日本の農業の歴史を振り返り、一方で経済のグローバル化を俯瞰（ふかん）しながら、日本の農業がいかなる困難に直面し、私たちの暮らしが脆弱（ぜいじゃく）であるかを説く。文章は平易で読みやすい。それだけに、この問題を特に若い人たちに考えてもらいたいという、著者の熱い思いが伝わってくる。

何よりも、自分たちの暮らしさえ守れればそれでよいという「虚弱な生活保守主義者」になっていないかとの厳しい問いかけがここにある。私たちは、暮らしを支えることを政府に期待し、かわりに政府が行なう戦争を黙認しているのではないのか、と。私たちは、自立していないのだ。農業を守るということも「生活保守主義」ではある。しかし、そこには自分たちの暮らしを自分たちで守るという積極的な意味合いがある。「日本の農業を考える」ということは、自分たちの安全保障を自分たちで考えるということに他ならない。本書には、その実践を始めた人たちがたくさん紹介されている。水田酪農や山地酪農、地域の農と食を結ぶ循環のまちづくりや伝統種の保存運動に希望をつなぐ。そういったことが、私たちの平和につながるのだということを、今改めて噛みしめている。

（調査研究担当　高橋 清貴）

国内ひろば

JVC network

会員登場！ 29

「ボランティア」の力を信じて

〈神奈川〉上田 恵一

私とＪＶＣとの出会いは、リタイヤした九九年十月に「ボランティア」の諸々が知りたくて受講したＪＶＣ連続講座でした。

当時、私のボランティアに対する知識は未熟で、《アマチュア》、《余暇の善用》、《身銭を切ってするのがボランティア》、《有償のボランティアってあるのか》、《シンクタンクになれるのか》など、漠然とした論理性の無い疑問を持って受講した事を憶えています。

しかしその後の五年間で、それまでの《同世代内会社つきあい》と違い、ＪＶＣやＪＩＣＡのシニアボランティア、協力隊など《異世代間つきあい》を体験してきました。若い皆さんが《それぞれを足場に》立派に巣立つ姿を見て、ＪＶＣなどの組織体が若者たちの跳躍の足場（インターン）として果たす社会的意義の大きさを知りました。出会いの素晴らしさを実感しています。

私は植民地の生活、戦争、引揚、戦後を体験しました。精勤はできませんが、時に過去の体験から皆さんと違う意見を述べることもあります。大いに参考にしてください。そのために顔を出しているみたいなものです。例えば、活動資金として財界や政府からの資金も遠慮せず貰いつつ、《己の信じる道》を進めば良い。クレームがつけば裁判に訴える手立てはいかがでしょうか。日本の優秀な官僚が保守化したのは、行政指導に対する異議を訴訟に求めず陳情でお茶を濁してきたからだと思います。

これからも「ボランティアで得た」力を信じて、活動してください。

■今、シニアボランティアで赴いたヨルダンで得た水浄化システムを、珊瑚礁地域へ放流される下水の浄化に応用できないか考えを巡らせ中です。共同研究者のアビールさんの娘は孫娘と同じ誕生月です。元ＪＶＣスタッフの吉野都さんにお願いして浴衣を着せてもらいました。

イベント報告　スタッフ帰国報告会

『ベトナム農村のいま ～そして、私たちの生活をみつめなおす～』

5月15日／東京

ハノイ事務所の伊能まゆによる帰国報告会が開催されました。現地の様子がビデオ映像でながされ、続いてＪＶＣの特徴ともなっている「村づくり委員会」を軸とした農村開発、生活改善について、スライドを使って説明されました。

村におけるＪＶＣの役割は、地域の環境に配慮しながら、その村が持続的に発展していけるよう、村人と一緒に考え、計画を実施し、問題点を解決していくことです。例えば、村全体から支持された堆肥（たいひ）。ＪＶＣ特製の堆肥は、よく発酵しているために重量が軽く、山岳部での運搬が楽で、収量も増える。また、緑肥となるセスバニアという植物を使った等高線農業。さらには、日本でも合鴨農法としておなじみのアヒル農法や、他の地域でも効果があがっている家畜銀行の取組みなど。

しかしその一方で、現地の厳しい生活の様子も伝えられました。アヒルが夜の内に盗まれてしまったり、そもそもアヒルを買うための資金が足りないこと。山岳地帯であるために耕地面積が少ない上、市場へのアクセスも制限されてしまうことから、栽培したとうもろこしを主食の米と交換するときに仲買人に買い叩かれてしまうことなど。

休憩時間には、ベトナム少数民族の衣装をまとったベトナムボランティアチームのメンバーからベトナム特選緑茶と緑豆のお菓子がふるまわれ、参加者もほっと一息。

後半の質疑応答では、住民の希望とＪＶＣができることとのギャップをどうやって埋めていくのか、他のＮＧＯとの連携はどうしているのかなどの議論が活発にかわされ、予定時刻を三十分もオーバーして終了しました。

（ベトナムボランティアチーム㋑）

■報告する伊能まゆ

■聞く側の参加者にも熱が入る

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：**00190-9-27495**
加入者名：**JVC東京事務所**

3月計　**4,921,642円**
4月計　**4,383,782円**

	3月	4月
無指定	1,524,262円	513,374円
タイ	1,152,000円	0円
カンボジア	0円	303,000円
ラオス	118,000円	390,000円
ベトナム	0円	0円
南アフリカ	11,980円	0円
パレスチナ	21,000円	1,157,040円
アフガニスタン	193,322円	68,193円
北朝鮮	85,000円	10,000円
イラク	1,816,078円	1,942,175円

②犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：**00100-8-212497**
加入者名：**犬養道子「みどり一本」**

3月計　**565,073円 / 42件**
4月計　**299,500円 / 36件**

③ JVCサポート募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

3月計　**131,000円 / 80件**
4月計　**140,200円 / 84件**

編集後記

落語に興味を持ったのはいつからだったか。北村薫『円紫さんと私』シリーズか、佐藤多佳子『しゃべれどもしゃべれども』か。と言っても、談志、三枝、志の輔などの師匠クラスをたまに観る程度ですが。枝雀、三木助をライブで観られなかったのが悔やまれます。特に晩年の枝雀は、高座にあがってきただけでクスクス笑える、という域にまで達していたとのこと。事務所の近くには鈴本演芸場もあるし、今年はぜひ米朝と小朝を観てみたいですね。(H)

新スタッフ紹介

田坂 直之（たさか なおゆき）
ラオス事務所／カムアンプロジェクト担当

一昨年まで、北海道や福島の農場で農業技術やCSAと呼ばれる地域で支えあう経済関係を学んできました。そして、「農」に生きる人々やその暮らしに魅せられるとともに、農村社会が抱える問題も実感しました。

昨年、南インドで日本政府と現地NGOとの間の調整員として働きました。そこで、希望を持って草の根で活動する多くの人々と出会い、今回JVCで働きたいという思いにつながりました。

自分が「ひとりの生活者」であることを忘れずに、また支援者の方々の思いを大切に活動していきます。「ひとりの…」と言いつつ、妻と一緒に行ってきます。

インターン紹介

毎年恒例の東京事務所インターン。今年は春夏二回の採用となりました。「春組」のお二人をご紹介します。

江口 由紀（えぐち ゆき）　広報インターン

大学三年のときにボランティアでお手伝いにきて、もっとNGOについて、JVCについて知りたいと思ったことがインターンになるきっかけでした。就職活動とインターンを同時にやりつつ、部活動、バイト、そして卒論…。「大丈夫かなぁ?」と思いつつ、「なんとかなるさぁ」とのんきに構えている私です。

現在は丸幸ビルの階段を元気に昇り降りしている日々です。「これで少しはスリムにならないかな…」と思う今日この頃。一年後の私は、知識は豊富に&体はスリムに!? みなさん一年後の私をどうぞお楽しみに。

鳥山 敦（とりやま あつし）
ホームページインターン

学生時代は、学園祭などの活動に自主的に参加し、「自分で動く」ことの意味を学ばせてもらいました。

その後、主に平和に関連して、時にはボランティアとして、また時には主催者側として様々な「動き」に参加し、その中でJVCを知りました。これからの世界の鍵は「非営利」にあると感じていましたので、そのノウハウを学びたく、また自分の持っているものを試そうと考え、インターンに応募しました。NGOの運営の現場をできるだけ見ていきたいと思っています。

以前にも他のNPO活動のホームページを管理していました。その時の技をいかして、素早く的確な情報提供を目指しますので、皆さまJVCのホームページをぜひご覧ください。

Trial & Error（試行錯誤）二百三十九号

一九八二年八月十六日 第三種郵便物認可
二〇〇四年六月二十日発行（通巻二百三十九号・隔月二十日発行）

発行人＝熊岡路矢
編集人＝大野和興・清水俊弘
編集スタッフ＝広瀬哲子
レイアウト＝細野純也

発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五 東京都台東区東上野一-二〇-六 丸幸ビル六階
電話［〇三］三八三四-二三八八 FAX［〇三］三八三五-〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング

定価＝五〇〇円（税込）

暮らしを彩る道具

LIFEWORK ITEMS

68

Laos

機織（はたお）り

凝った柄のパービアン（肩掛け）を、熟練した手さばきで織りあげる若い女性。（ラオス・ルアンナムター県にて　90年代後半に撮影）

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員　10,000円
◎学生会員　5,000円
◎団体会員　30,000円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら（会員担当）へ。
hosono@jca.apc.org

会員数（6月3日現在）合計 1,493人
（正会員 620人　賛助会員 873人）

■オリエンテーション(説明会)へどうぞ。

JVCの活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料・予約不要です）

第1月曜日　午後7：00－8：30
第2・第4土曜日　午後2：00－3：30
※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

jvc@jca.apc.org

■ URL（ホームページ）

http://www1.jca.apc.org/jvc/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。